



# CONTENTS

## 活動報告 SUAC Report

- フェアトレード大学になることは 下澤嶽 / 国際文化学科 2
- 大学から取り組む防災・減災 河村洋子 / 文化政策学科 3
- SUAC映画祭のはじまりとこれから 高島知佐子 / 芸術文化学科 4
- 活動報告 室内楽演奏会2017 梅田英春 / 芸術文化学科 5
- ゾロアスター教研究 青木健 / 文化・芸術研究センター 6
- 近世静岡の建築普請研究とTakumi&Design 新妻淳子 / 文化・芸術研究センター 7

## 開催報告 平成29年度 研究成果発表会 8

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター

静岡県浜松市中区中央2丁目1-1 〒430-8533

●Tel:053-457-6105 ●Fax:053-457-6123 ●http://www.suac.ac.jp/

# A r t & C u l t u r e



デザイン学部長

伊豆 裕一

Yuichi Izu

## デザイナーはなぜ絵を描くのか

多くのデザイナーは、デザインを創造する過程において、スケッチといわれるデザインのイメージを表現した絵を描きます。これは、スケッチが新しい考えや創造性を刺激するものとして認識されているためであり、多くのデザイナーによりスケッチには新たなデザインの導出を促す効果のあることが指摘されています。

たとえば、ヨーロッパの高級スポーツカーのデザインで有名なカーデザイナーの奥山清行氏は、インタビューに答えて「手の動きは、頭で完全にはコントロールできない。たくさん描いているうちに、偶然思いがけない線が描けて、そこから新たなデザインに発展していくことがある」と回答しています。これは、スケッチを描くことでデザイナーは偶然なアイデアの発見に遭遇しやすくなるということを示しています。また、米国の研究者からは、スケッチについて「言葉で形成された発想を乗り越える意思を伝達する」や「あらゆる要素を同時に関連付ける」といった効果が報告されています。

絵を描く行為は、その目的によりいくつかに分類できます。このうち、目で見えたモノを上手に再現する行為は写生やデッサンと呼ばれ、日本の美術教育では、これが良くできることで「絵が上手い」といわれることが多いように思われます。そのため、子供の頃の図画の時間に写生が上手に描けなかったために、「自分は絵が下手だ」と思っている人も多いのではないのでしょうか。しかし、デザインのためのスケッチはそれとは異なるものです。なぜなら、写生やデッサンが目で見えたモノを描くのに対し、スケッチはデザイナーの頭のなかにある、まだ世のなかに存在しないモノを描くものだからです。小さな子供は、目で見えたモノ以外に、いろいろなモノやコトを想像しながら絵を描きます。デザイナーも頭のなかで新しいモノや空間を想像することで、創造したイメージをスケッチとして描きます。

それでは、目で見えたモノを上手に描くことのできる人でない

と、頭のなかに創造したイメージを上手に描くことはできないのでしょうか。そのことに疑問を感じ、以前デザインを学ぶ30名の大学生が描いたデッサンとスケッチの評価結果を比較したところ、両者の評価の間に相関関係は見られませんでした。すなわち、評価や分析方法の詳細は省きますが、デッサンの評価の高い学生のスケッチの評価が必ずしも高いわけではなく、デッサンの評価が高くともスケッチの評価の高い学生は多く見られたというわけです。

小さな子供は、新鮮なアイディアに溢れた魅力的な絵を描きますが、目の前に置かれた花を正確に描くことはできません。これと同様に、デザインの創造において、頭のなかにあるイメージを絵に描く能力は、目で見えたモノを絵に表現する能力とは異なると考えることができます。実際、私がそれまで特別な美術教育やデザイン教育を受けたことのない、工学部の学生達にスケッチ教育を行った際には、3日間の教育で多くの学生が上手にスケッチを描けるようになりました。

近年、デザイナーがデザインに用いる手法をビジネスに応用した問題解決手法として、デザイン思考という言葉が注目されています。それに合わせて、デザインの対象もプロダクトやグラフィックと言った色や形を伴うモノのデザインから、ビジネスにおける課題解決や地域の活性化などを目的としたコトのデザインへと広がっています。では、コトのデザインを行うにあたってはどのような絵が描けると良いのでしょうか。コトのデザインのなかでも、人と人とのつながりや相互の関係のデザインを目的とした、インタラクションのデザインを指導するなかで、私は日本が世界に誇る文化といわれるマンガに注目しています。子供同士の触れ合いを促進する公園のデザインをテーマとした演習において、1枚の用紙に5コマのシーンとセリフを記入する、絵コンテと呼ばれるマンガ風の絵を描くようにしたところ、それまででない面白いアイデアがいくつも提案されました。

写生やデッサンが目で見えたモノを表現し、デザインのスケッチが頭のなかに創造したイメージを表現するものであるとすれば、マンガは頭のなかで想像したシーンをその登場人物に加えて、周りの状況や他の登場人物との関係とともに表現するものといえます。コトのデザインとは、対象ユーザーの経験や体験のデザインであり、マンガはその表現手段としてまさに適したものであるといえます。現在、多くの日本人は、物心のついた時からマンガに親しんでいることもあり、最近の学生たちのマンガ表現の巧みさには驚かされます。

デザイン思考は、ビジネスやコミュニティーにおける課題解決の手段として一層の活用が期待されています。そう考えると、マンガ文化に親しんだ日本の若い世代が世界のデザインをけん引する日も近いかもしれません。

# フェアトレード大学になることとは ～人の顔をした商品を生み出す拠点に～

下澤 嶽 (国際文化学科)

静岡文化芸術大学が国内初のフェアトレード大学に

静岡文化芸術大学が2018年2月1日、国内で最初のフェアトレード大学に認定された。大学内の多くの方々のご理解と協力があったからこそ成し遂げられた成果であり、その中心的な役割はやはり学生だったと思う。特に2011年からフェアトレードサークルで熱心に活動を続けて、大学から旅立っていった卒業生たちの顔が浮かんでくる。改めて協力いただいたすべての皆さんに感謝を伝えたい。

戦後、欧米のNGOが、開発途上国の人々の仕事づくりのため手工芸品を製作し、販売したのがフェアトレード運動の始まりで、当時は「ハンディクラフト・プロジェクト」などと呼ばれていた。80年代に入り、コーヒー、紅茶、カカオ、バナナ、砂糖など、開発途上国のプランテーション産業の生産者を擁護する代替商品として急速な広がりを見せるようになった。生産者が人間らしい生活を維持でき、子どもの将来を描ける収入を保障する貿易ということで「フェアトレード（公正な貿易）」という呼び方になっていった。

日本フェアトレード・フォーラムが2015年6月、1,076人を対象に調べた調査では、フェアトレードという言葉で「貧困や環境に取り組む活動である」と答えられた人は29.3%で、3年前の25.7%から上昇しているとしている。その数字は、60代だと24.9%だが、10代になると34.6%と高くなる。高校の教科書にフェアトレードが取り上げられることが多くなり、センター試験で最初のフェアトレードの出題があったのが2009年（英語）、その後は2010・2012・2013年（現代社会）、2014年（倫理）、そして今年も地理Aで「フェアトレード」が取り上げられている。フェアトレードへの認識は若い人に向かって広がり続けている。

東日本大震災以後、フェアトレードに限らず、地産地消、食品の安全・安心、動物福祉（人間が動物に対して与える痛みやストレスといった苦痛を最小限に抑え、動物の心理学的幸福を実現する考え）、フードロスの抑制、障がい者の雇用とつながる消費へと、その関心は水平的に国内にも広がり続け、「途上国を助ける」という考え方から、「あらゆる人、動物、地球にやさしい生産と消費」への広がりが見られる。もちろんフェアトレードの概念もこの中に含まれている。こうした消費意識の変化を「エシカル（Ethical＝倫理的な）消費」と呼び、消費者庁だけでなく、浜松市も積極的にその重要性を訴えている。

## 人の顔をした商品を

18世紀以後世界を席卷し、社会構造を変える根本原理と

なった商品は、人間の欲望を無限に引出す魔力を持ち続けている。商品がひとつの人格のように描かれ、安さの理由を隠すため生産者は匿名化されていった。こうした商品の姿はまるで、宮崎アニメ「千と千尋の神隠し」の特異なキャラクター、カオナシを思い出させる。カオナシは自分のカオをもたず、欲望で人を操り、自分も醜く欲望を貪る。しかし作品の中のカオナシはどこか寂しげだ。私たちは「人の顔を持たない商品」が中心のグローバル社会で、どこかカオナシのように「豊かさ」と「生きづらさ」の両方を手に入れているのかもしれない。商品が生み出した欲望の世界を特定の企業のせいにはできないだろう。なぜなら、企業は、消費者の鏡でもあり、相互依存の関係でもあるからだ。消費者の変化に企業は必ずついてくる。商品の裏側にいる生産者の存在を掘り起こし、その距離を縮め、「人の顔をした商品」に変えていく作業が、今のシステムをゆっくり変えていく方法のひとつなのかもしれない。それは、ひとりひとりの意思と、その小さい行動の積み重ねを、織物のように織り上げていくことなのかもしれない。その一歩を促すことができるのが、フェアトレードの最大の特徴だと思う。

## 大学として何ができるのだろうか

浜松市のフェアトレードタウンの認定、続けて静岡文化芸術大学のフェアトレード大学の認定を受けて、多くの方のご関心とお祝いのお言葉をいただいた。しかしこれは、フェアトレード関係者の小さな努力の積み重ねをつなげ、見えるようにした成果であって、浜松市や静岡文化芸術大学は、日本のどこにでもある普通の場所だと思う。これらの認定は、フェアトレードを大事に思い、これから行動に変えていくという私たちの意思表示に対する応援メッセージであり、実践と思考のスタートラインだと考えている。

2017年11月に、静岡文化芸術大学で開催されたフェアトレード全国フォーラム2017のパネルディスカッションで、パネリストの一人である横山学長は、「大学として認定を受けることの意義は、ビジネス組織、行政組織とは別の強み、すなわち『公正』とは何かを、様々な時と場に応じて共に考えながら、若い人たちも育ててゆけるという強みを発揮できるところにあると考えている」と発言された。未来社会の種は、常に新しい変化を望む無垢な若者の中にある。その若者が集まる大学は、競争社会と商品の利害関係から遠い場所にいる。未来のグローバル社会の「フェア」とは何なのか、大学だからこそ問かけられる方法と言葉は何だろう。日本で最初のフェアトレード大学としての責任の重さと可能性を改めて感じている。

# 大学から取り組む防災・減災

河村 洋子 (文化政策学科)

私は公衆衛生の中でも社会科学に寄った行動を促す方法や戦略と言った、方法論である「ヘルスコミュニケーション」を専門としています。前任校の熊本大学で約7年間を過ごす中、2016年4月には「熊本地震」を経験しました。着任後、本学で防災を担当している財務室の佐々木哲也さんから大学の組織としての取り組みや学生サークル「さいのこ」の活動について教えて頂きながら、少しずつ佐々木さんとさいのこメンバーと一緒にチームとして動き始めました。今年度、「ふじのくに地域・大学コンソーシアム」の大学連携公開講座の助成を受け、3回にわたり「防災減災」をテーマにした講座を開講しました。内容はチームの話し合いの中で出た「こんなことしたい」「こんな機会を持ちたい」というアイデアをまとめたものでした。

第1回(2017年11月11日開催)は大学生など若い力を防災減災活動の中でどのように活かすことができるのかを、考える機会としたいと思い、企画を練りました。熊本地震を経験し、その時に自ら動いたり、その経験をもとに動き始めた熊本大学の澁谷さんと古賀さん、熊本県立大学の岩崎さんをお招きしました。地元からは本学の「さいのこ」代表、文化政策学科の菊池さんと浜松医科大学の防災支援サークルLuceの代表である菅沼さんから自分たちの活動を報告してもらいました。報告の後、私の進行で学生5名による「若い力の活かし方」をテーマとするパネルディスカッションを行いました。

熊本県立大学の岩崎さんは避難所となった大学で「なりゆき」で学生ボランティアのリーダーとなったこと、他大学の学生と一緒に熊本市のボランティアセンターの運営体制をつくっていった様子を淡々と語ってくれました。この運営体制は「熊本方式」と呼ばれており、聴衆からの質問も多く寄せられました。澁谷さんは震災後に入学し、防災活動サークルを立ち上げました。古賀さんが代表をつとめるサークルは「進化系」とも言え、風評被害を含め震災の影響を受けた観光地の復興支援を「ツーリズム」というアプローチで行っています。このような澁谷さん、古賀さんの活動はいずれも復興支援として地域を元

気にする取り組みであり、本学の学生たちにも自らの役割の可能性を提案してくれるものでした。地元の浜松医科大学のLuceの菅沼さんは、医学単科大学として専門性の高い活動を紹介してくれました。本学サークル「さいのこ」代表菊池さんからは非常食試食会を通して、食という日常的な活動の中で、防災活動を「ゆるく細く長く」展開していくことが報告され、学生たちの素晴らしい活動の様子を共有することができました。大切なことは学生同士の連携やつながりをつくっていくことです。講座開催後も地元では互いの活動に参加し合い、遠く熊本ともつながりは続いているようです。これこそ、大きな収穫であり、今後に通じる土台づくりであったといえます。

第2回(2017年12月15日開催)のテーマは一転、甚大災害発生時の大学のレジリエンスでした。浜松医科大学の松井施設課長、静岡県立大経営情報学部の湯瀬教授、本学デザイン学部中野准教授から各大学における「備えの状況」が報告されました。その後、本学文化政策学科の田中教授がパネルディスカッションを進行し、大学の備えとレジリエンスを高めるためにはどうすればいいのか、議論を深めていきました。各大学に特徴があり、ハード面の整備もさることながら、「動ける体制」といったソフト面が特に重要であることが明確になる議論でした。ハードの施設・設備を活かすのも人です。初歩的なことですが、防災・減災の備えに関して、まずは自分の所属している組織のこのことを知ることが大事だと気付く機会になりました。

第3回(2018年1月12日開催)は燦々と太陽が差し込む自由創造工房でHUG(避難所運営ゲーム)のワークショップを、地域住民の方々も交えて行いました。最初に、浜松医科大学健康社会学講座の尾島教授から「避難所運営のイロハ」と題してご講演頂きました。そして同講座の岡田助教のリードの下、様々な立場の人が混ざったグループに分かれてHUGワークショップを行いました。「さいのこ」のメンバーもサポートに入り、大学生、地域住民、行政職員、NPOなどで活動されている方、大学関係者など、背景の異なる方々が意見を交わすとても良い機会になりました。参加者の方々のアンケート結果からも、短い時間ながら有意義な学びがあったことを感じる事ができました。

今年度、本学で3回にわたり、異なったグループを対象に防災・減災について考えて頂く場をつくる事ができました。実感したことは、防災・減災についての関心は高く皆大事だと認識している。でも日常的に考えない(考えたくない)ことである。だからこそ考える機会をつくっていくことが大切であるということです。そして、「さいのこ」のポリシーでもあるのですが、日常的な部分で防災・減災を織り交ぜていくことはとても大事であると思います。来年度も、学生たちと一緒に、地域の方々を交えて日常の中での防災・減災活動を想像力と創造力をもって展開していきたいと思っています。引き続きご支援のほど、よろしくお願い致します。



第1回のパネルディスカッション (2017.11.11)

# SUAC映画祭のはじまりとこれから

高島知佐子 (芸術文化学科)

SUAC映画祭は、「観て、食べて、交流する」をコンセプトに2017年度から始まった映画上映イベントである。映画で世界を旅し、多様な価値観を学び、世代を超えた交流につながるイベントにすることを目的に、2017年6月と12月の2回開催した。第1回目は「西側から見た生き方」をテーマに、アメリカ、ヨーロッパの映画を中心に上映した。第2回目は西から東へ旅をしようと「シルクロード」をテーマに、イタリア、中東諸国、中国の作品を上映した（上映作品は表を参照）。

SUAC映画祭のはじまりを振り返ると、実は教員の懇親会で好きな映画が話題になったことに端を発している…。映画は異なる価値観を知り、新しい気づきを得やすい身近なコンテンツという点で、映画祭の構想が持ち上がった。ちょうど私のゼミ生がミニシアターを卒業論文のテーマにしているなど、映画や映画館に関心を持つ学生がいることがSUAC映画祭の実現を後押しした。現在、SUAC映画祭はデザイン学部と文化政策学部の学生9名により企画・運営されている（9名以外もサポートメンバーとして流動的なメンバーが数名いる）。

SUAC映画祭は、映画上映後に毎回、おやつ付きのワークショップなどを開催することが特徴になっている。学生の話合いで、早い時期から映画上映+αの企画の必要性が示された。インターネットでの映像視聴サービスや100円でDVDがレンタルできる状況を踏まえ、映画を観に行く価値を作るにはどうしたら良いかが議論された。そこで考え出されたのが学びと交流を深めるためのワークショップやトークイベント開催である。さらに、食の要素を入れることで交流が進むと考えた。また、会場の雰囲気づくりも付加価値形成には必要という視点も提示された。そのため、教室ではなく、西ギャラリーと瞑想空間を会場に、ゴザやソファなどを用意し、参加者が好きなスタイルで作品を観ることができるよう工夫を施すことになった。

上映作品の選定では、浜松市内にある映画館3館（TOHO系の2館と独立系の映画館であるシネマイーラ）との差別化を図り、映画を好きになるきっかけになるようなラインナップにすることが決まった。具体的には、(1)浜松で流通しにくい映画、

(2)ドキュメンタリー作品、(3)話題作や海外映画祭受賞作品の3点を考慮して映画を選ぶことになった。

実際に上映作品を決定し、ワークショップやトークイベントと提供するおやつを検討する段階では様々な困難があった。上映権付きDVDを扱う業者は複数あり、各業者からリストを入手し上映したい作品を扱う業者を探す。上映形態により価格が違うため、作品ごとに異なる業者に対し企画の意義を説明し、少しでも安価に借用する交渉をする。第1回目では提供するおやつを東海調理製菓専門学校と本学の学生と一緒に企画した。何度も打ち合わせを行い、試作してもらい内容を決めた。同時進行でワークショップ等の企画も考えなければならず、学生の負担は増していった。加えて、会場づくりでは、瞑想空間の壁に自前のスクリーンを吊るすことになり、地域連携室や木材加工室の助言・協力を得ながら何度も製作方法を見直し、第1回目開催の直前まで作業をすることになってしまった。

このような工夫を凝らした甲斐があり、映画祭には高校生から高齢者まで多くの方が参加くださり好評だった。企画に関心を持ってくださる方が多く、地域の方々から協力や連携のお話もいただいた。上映後に学生へ直接声をかけてくださる参加者が多く、イベントの継続を望む声も寄せられた。第1回目に生まれた地域との関係から、第2回目では学外でのイベントを開催することもできた。計2回の開催で得られた成果の一つに、映画祭に様々な方が関心を寄せてくださることで、映画祭をきっかけに参加者が地域の多様な活動を知り、そこから新しい関係が生まれようとしていることが挙げられる。企画・運営している学生たちも、この点には手応えを感じており、「準備が大変でも企画は変えない方がいい」と考えている。一方で、課題も多くある。

本年度のSUAC映画祭は（公財）浜松市文化振興財団の助成金と大学の資金により開催できたが、いずれも継続的なものではない。映画祭がハブとなるような地域との関係を築き発展させつつ、継続的な開催を実現するための仕組みづくりをこれからしていかなければならない。

第1回上映作品

タイトル	監督	制作国	日本劇場公開年	ワークショップ・トークイベント	おやつ
バレエボーイズ	ケネス・エルヴェバック	ノルウェー	2015年	ノルウェーの変わった風習「RUSS（ルス）」。ルズ的に北欧菓子「クルームカーケ」にクリームやトッピングを好きなだけデコレーション。	ワークショップで作るクルームカーケ
やさしい本泥棒	ブライアン・パーシヴァル	アメリカ	日本劇場未公開	本を読みたくなる、愛おしくなる「しおり」作り。	ドライフルーツたっぷりのドイツパン・ベラベッカ（映画の舞台がドイツ）
LIFE!	ベン・スティラー	アメリカ	2014年	映画の舞台になった写真雑誌「LIFE」づくり。	劇中に登場するお菓子クレメンタインケーキ（オレンジケーキ）
おいしいコーヒーの真実	マーク・フランシス ニック・フランシス	イギリス アメリカ	2008年	本学サークル「タペボラ」提供。コーヒーを楽しみながら、フェアトレードについて学ぶ。	コーヒーに合うマシュマロ入りのカラフルなウービーパイ
マリーゴールド・ホテルで会いましょう	ジョン・マッデン	イギリス アメリカ アラブ首長国連邦	2013年	映画の舞台にちなみ、好きなスイーツでのオリジナルチャイ作り。	マリーゴールドの花をイメージしたスパイス、紅茶、ナッツなどが入ったボンボンショコラ
ダブリンの時計職人	ダラ・バーン	アイルランド	2014年	オリジナル壁掛け時計作り。	アイルランド産の「カラギーナン」を使用しオーロラをイメージした色とりどりのゼリー

※全てのおやつは東海調理製菓専門学校の協力により提供。

第2回上映作品

タイトル	監督	制作国	日本劇場公開年	ワークショップ・トークイベント	おやつ
シーヴァス 王子さまになりたかった少年と負け犬だった闘犬の物語	カアン・ミュージデジ	トルコ	2015年	※イベント前、Adictos CoffeeのウジエルさんによるBBQと温かい飲み物	イタリアのマスカルポーネを使ったガトーショコラ
ローマに消えた男	ロベルト・アンド	イタリア	2015年	近年話題のバスターアット。バスターでクリスマスオーナメントなどを作る。	直火で1杯ずつ作るトルココーヒー。トルコ料理店・ターコイスの協力。
裸足の季節	ドゥニズ・ガムゼ・エルグヴァン	トルコ	2016年	トルコランプ風のキャンドルホルター作り。	—
歌声にのった少年	ハニ・アブ・アサド	パレスチナ	2016年	中東の宗教を専門にする青木健教授による中東音楽に関するミニトーク。	—
少女は自転車に乗って	ハイファ・アル=マンズール	サウジアラビア ドイツ	2013年	中東の香りの文化にヒントを得た練り香水作り。	サウジアラビア名産のデザートとドイツの紅茶メーカーが作る香り豊かなデザート
これは映画ではない	ジャファール・パナヒ モジタバ・ミルタマスフ	イラン	2012年	浜松でドキュメンタリー制作に関わる内山丈史氏によるトーク。浜松市鴨江アートセンター提供。	ローズウォーターとミントウォーターをフレーバにした紅茶とビスタチオが入ったイラン銘菓のギャズ
グオさんの仮装大賞	チャン・ヤン	中国	2014年	アーティスト・ロビンス小依さんによる仮面作り。浜松市鴨江アートセンター提供。	杏仁とあんずのパウンドケーキ

※ガトーショコラとパウンドケーキは東海調理製菓専門学校の協力により提供。

# 活動報告 室内楽演奏会2017

梅田 英春 (芸術文化学科)

「室内楽」といえば、たいていは、弦楽四重奏、ピアノ五重奏などの室内で、少人数で演奏される音楽を想像するでしょう。しかし私たちの大学が用いる「室内楽」は、西洋芸術音楽に限定しません。たしかにこの言葉は特定のジャンルに用いられますが、書いて字の通り、「室内で演奏される音楽」であり、ジャンルは限定されていないのです。静岡文化芸術大学が行う室内楽演奏会は常に「室内で演奏される世界音楽」を意識しています。そこには世界中のあらゆる人々が奏でる音楽が含まれます。

正式には「静岡文化芸術大学の室内楽演奏会」とよばれる一連の演奏会は、すでに10年以上も継続しているもので、現在では、「世界音楽」を対象とした大学が主催する演奏会であり、監修者となる教員と1年から3年までの学生約20名が協働して企画・準備・運営まですべてを行うプロジェクトです。大学が主催して実施する以上、大学だからこそできる特色のある演奏会を行う必要があります。それゆえほとんどのプログラムは、テーマに基づいて演奏者や研究者のレクチャーと演奏が両輪になっています。

今年度の最初の企画は「村松健 ピアノ・三線コンサート」(7月15日開催)です。これは、監修者である私自身が「音楽の力」をテーマに継続している企画で、今回は「癒し」をキーワードに、1983年にデビューし数多くのピアノ、三線作品を創作・演奏する奄美大島在住のピアニスト村松健氏を迎えてコンサートを実施しました。「癒し」をテーマに、演奏者と私の対談を行い、「癒し」について「受動的な聞き方」、「能動的な聞き方」を中心に話を展開しました。

秋から冬にかけて二回の演奏会を実施しました。一つは、レクチャー&コンサート「北海道アイヌの自然への思い」(11月18日開催)です。こちらは学生の企画を形にしたもので、少数民族であるアイヌの音楽と舞踊を、研究者の解説を通して学び、鑑賞するだけでなくワークショップを通して体験するイベントでした。研究者でありトンコリ演奏者の千葉伸彦氏、またムックリ(口琴)演奏者・舞踊家の恵原詩乃氏を迎えたイベントでした。同じ国に住むアイヌ民族の存在、文化を再認識する場となりました。

もう一つは、浜松で有名なラッパを取り上げたイベント、レクチャー&コンサート「ラッパの変態」(12月9日開催)です。「変態」とは、「変わりゆく姿」を表現したもので、西洋から軍隊に導入されて以後、各地の民俗楽器となっていったラッパに焦点を当て、二地域(浜松と長野県諏訪地方)のラッパ音楽を比較しました。レクチャーは、ラッパ音楽の研究者として知ら

れる奥中康人本学教授にお願いしました。祭りの中で演奏されるラッパの旋律は、浜松市民には馴染みがありますが、「音楽」として聴くことはほとんどなかったと思います。これも大学ならではの新しい試みでした。

3月17日には今年度最後の演奏会「はるのかもえおんがくかい」を予定しています。これは学外施設を利用して行う企画で、学校教育で用いる鍵盤ハーモニカ、リコーダーといった教育楽器を演奏会で用いられる楽器として再評価しようという学生企画のイベントです。「おんがくしつトリオ」を招聘し、教育楽器の面白さを紹介します。浜松は楽器の街として知られ、多くの企業が教育楽器を作っています。「楽器産業と音楽」も室内楽演奏会にとって重要なテーマの一つです。

このプロジェクトは一年を通して行われていることから、教員と学生は長期休暇中を除き、毎週一度昼休みにミーティングを行い、各演奏会の担当者からの提案事項の検討や報告が行われます。また目標来客人数を設定し、それに向かってどのような広告・宣伝の工夫が必要かを皆で話し合います。後援団体の申請、補助金の申請、さらには当日運営のマニュアル作成も当日運営もすべて学生により行われるのです。また大事にしていることは、アンケートの集計と分析であり、これは必ず演奏会終了後、担当者により発表され資料は共有されます。現在は第三者による外部評価や検証のシステムはありませんが、そうしたフィードバックも必要だと考えています。なお「室内楽演奏会2017」は、実践演習のプログラムの一つとなり単位化されています。

最後になりますが、本プロジェクトのメンバーで2年生の濱田滉太君が急逝しました。監修者としてはともに一年度を終えられなかったことが残念でありませんが、彼のほにかんだ笑顔を忘れずに次年度もこのプロジェクトを継続していく所存です。この場を借りて追悼の意を表したいと思います。



# ゾロアスター教研究 —観念的宇宙の美とインディ・ジョーンズ風の探求—

青木 健 (文化・芸術研究センター)

*ašəm vohū vahištəm astī*  
*uštā astī uštā ahmāi*  
*hyat\_ aš\_āi vahištāi aš\_əm*

これは、ゾロアスター教の聖呪「アシュム・ウォフー」の一節である。紀元前1500年の昔、「白色家の老いた駱駝の持ち主」と称したザラスシュトラ・スピターマが、中央アジアの荒野で唱えたこの句は、人類が最初に記録に留めた純然たる言語の魔法である。この句の喚起する言語の憑依力は、一たびザラスシュトラの口から出るや、現実には荒涼たる砂漠の只中にあるにも拘らず、古代には未だ嘗て存在していなかったであろう絢爛たる観念的宇宙を表象して見せる。斯界の権威、Mainz大学のHelmut Humbachによれば、この聖呪は下記のように訳せると云う。

真実こそ、善の中の最高のもの  
望まれるように、望まれるように、真実は  
真実を体現する者の為にある

牧畜しか知らぬ民草の間で、神の啓示を受けたザラスシュトラの切実な内的要求を満たすべく、「真実」とか「善」といった抽象的な言葉遣いの観念連合が駆使され、独特の宇宙観が表明される。確固として手に触れるべき対象が何もない純粋に人工の構図によって、ザラスシュトラは、世界の起源、宇宙の構造、人類の行く末、来るべき終末などのことどもを説いた。筆者は、一切の肉感的要素を超え、現実から浮遊して漂い、日常を滅却したところに超常のことがらを見ようとする3500年前のザラスシュトラの試みに惹かれ、その時代に特有のパセティックな宇宙論をそこに見出して、ゾロアスター教の研究を始めた。

\* \* \*

しかし、魅力を感じることに研究することは、自ずから別である。近代ヨーロッパ文献学の方法論を採る限り、ザラスシュトラが描き出す魅惑的な世界に引き込まれて、共に陶醉することは許されない。想像力の放恣が古代の宇宙イメージに追従してこれを増幅させていくのは、厳密に避けなくてはならない。情操の乾いた近代的な研究の範疇では、研究者の主観は存在する余地がない。このように、研究対象に酔うことと客観的に研

究することはお互いに排斥し合うので、筆者にとって、その融合点を求めることは火を水で包むような難事である。

ザラスシュトラの幻想的デフォルマシオンはそれとして、ザッハリッヒに研究を進める場合、古代宗教の理解にとって障害となるのは、文献の精緻な解読以前に、その解読を支えるべき文献の明らかな混沌である。例えば、アラビア文字による写本—アラビア語、近世ペルシア語、オスマン・トルコ語、チャガタイ・トルコ語、ウルドゥー語などの写本—は、世界に600万冊ほど現存していると推定されるが（もちろん、この背後には膨大な散逸写本が隠れている）、そのうちの僅からパーセント程度が研究済みであるに過ぎない。このように脆い基盤の上に立って結論が導かれる文献学に対して、過重評価は禁物である。あらゆる結論は過渡的・暫定的なものに過ぎず、その上に立って体系化された思想史は、間違っていることがしばしば確実な思弁憶測であることを前提に読まれなくてはならない。

この現状をどう研究するか？ 筆者は、一等明晰な解決策は、理論体系の整備を犠牲に供しても、個々の写本の発掘と解読という個別研究の充実であると信ずる。今では、20代の陶酔は、全く別次元の現地調査—写本を追究する上でのインディ・ジョーンズ張りのフィールドワーカーに席を譲り、イランから中央アジア、インドに至る地理的範囲内で、スクロール型（ユダヤ教に多い）、コーデックス型（最も一般的）、アコーディオン型（中国からの影響）、上綴じ型（詩集に多い）などの古写本を渉猟しては解読している。この作業が天地を動かすとは言わないけれど、この方法論の有効性への信頼が、筆者の研究を支えている。



2017年8月にトゥルファンにて調査中

# 近世静岡の建築普請研究とTakumi & Design

新妻 淳子 (文化・芸術研究センター)

現在の静岡県は明治9年(1876)に誕生したが、それ以前は遠江・駿河・伊豆の三国に分かれていた。筆者は江戸時代(近世)の駿河を中心に、工匠たちの活動と幕府の建築普請活動に関する研究を継続している。静岡県内には、徳川家康の隠居所の駿府をはじめ徳川家ゆかりの社寺が所在し、それぞれ江戸幕府の庇護を受けていた。幕府や地元工匠によって造営された伝統的な建築物は、優れた技術・意匠・美術・工芸からなる総合芸術作品といえる。戦災を免れた名建築は文化財として今日まで大切に受け継がれ、静岡県の伝統工芸の礎を築いてきた。ここでは、近世静岡の建築普請研究の概要と今後の展開、その延長線上にある伝統建築・工芸とSUACのデザイン教育(Takumi & Design)との関わりについて考えてみたい。

## ■徳川家康と静岡 一家康の造営

幼少期を駿府で過ごした徳川家康は、元亀元年(1570)浜松城に入城した。築城で力を発揮したのが、後に江戸幕府の造営を取り仕切る木原氏と鈴木氏である。その後家康は天正14年(1586)駿府城へ、同18年には江戸を居城とし、慶長8年(1603)江戸幕府を開いた。翌年、徳川家の祈願所として駿府の静岡浅間神社を再建している。慶長12年、家康は駿府を隠居所と定め、駿府城の造営と町割りを行なった。駿府城は大工棟梁中井大和守正清によって完成されたが、寛永12年(1635)の火災によって悉く焼失した。元和2年(1616)家康は駿府城で生涯を閉じると遺言により久能山に埋葬され、中井正清によって久能山東照宮が造営された。国宝の本殿・石の間・拝殿は、建物が連結した複合社殿で権現造りと称され、その後、日光東照宮や徳川家ゆかりの東照宮において権現造りの社殿が建立されている。駿府は、寛永以降幕末まで幕府直轄領として諸藩とは異なる歴史を辿る。

## ■徳川秀忠・家光と静岡 一家康以降の造営の時代

浜松城下の五社神社・諏訪神社は秀忠の産土神として知られている。元和元年(1615)自らの発願により、後の大工頭鈴木氏と浜松棟梁によって両社同時に造営された。家康が宿所とした中泉(磐田市)の府八幡宮社殿も同様の体制で建立されている。家光は、家康と秀忠の建築普請を基に日光東照宮等の大造営を展開した。久能山東照宮には五重塔を建立、諸堂社の檜皮葺屋根を銅瓦葺に、廟所の宝塔を石造に改めた。寛永9年(1632)に幕府の建築造営を担う作事方が設置され、大工頭木原氏の下、静岡浅間神社、五社・諏訪神社、三嶋大社の再造営が行なわれた。静岡浅間神社には駿府棟梁、五社・諏訪神社には浜松棟梁が参画している。

## ■元禄期の修営 一修復の時代

幕府作事方に遅れて主に修復を担当する小普請方が設置され、世は修復の時代へと移った。作事方大工頭と被官の一連の建物視察によって幕府による修営年次計画が立てられた。静岡県においては、遠州一宮(森町の小國神社と天宮神社)と駿州村山浅間神社(富士宮市)の三社同時造営が行なわれている。造営の指揮を執るのは、作事方大棟梁甲良豊前と弟次郎左衛門で、江戸町棟梁、そして駿府棟梁花村氏が国を越えて三社に関わっていたことが解った。その後、元禄地震、宝永地震、富士山の噴火が発生、駿府城の修築は行なわれるが、幕府の財政は逼迫し、多くの社寺の修復は延引される。

## ■静岡浅間神社の文化度再建 一利金等による造営・修復

寛永造営による静岡浅間神社社殿は、その後の二度の火災で全焼した。そこで駿府城代・町奉行が再建の計画を幕府に上申し、先の造営に参画した駿府棟梁家を中心に諏訪の彫物大工立川一門を加えて再建が行なわれることになった。文化元年(1804)から毎年交付される利金で継続的に造営を行ない、慶応元年(1865)に全社殿が完成された。現存の社殿26棟は重要文化財である。彫物大工立川一門は、遠江の社寺建築彫刻や掛塚屋台等も手掛けた。

## ■静岡の木材・石材

天竜川・大井川・安倍川・富士川の上流域からは河川を利用して豊富な木材が送られた。天竜川河口の掛塚からは江戸・大坂など東西各地へ広く回漕されている。伊豆半島産出の伊豆石は、江戸城石垣に使用されたことは広く知られ、これら地元産出材の地元使用に着目した研究を継続したい。

## ■静岡のものづくり文化

駿河漆器・駿河雑具・駿河指物は、装飾豊かな漆塗りの社殿で構成される久能山東照宮や静岡浅間神社の造営に由来するといわれる。また、プラスチックモデルの前身の木製モデルは、木材加工の端材を有効活用したものという。近世静岡の木材資源と名建築を創り上げる技術、人との繋がりが静岡のものづくり文化へと継承されてきた。駿府の近世・近代の町絵図からは職人町や職人について読み取ることができ、当時の建築普請を重ねることで、ものづくりの営みを浮かび上がらせたい。

## ■Takumi & Design

伝統建築・工芸の技術・技能そのものを記録・探究する「深める研究」、幅広いデザイン技術について「拡げる研究」はそれぞれ個別に行なわれてきた。それらを共通言語で深く結びつける「つなぐ研究」を展開することで、SUACから未来へ継承される日本の新たなデザインの創造が可能になると考える。

平成29年度 静岡文化芸術大学 研究成果発表会

日時 平成29年11月2日(木)

会場 南280中講義室

- (1) 武田 好 (国際文化学科)  
「子どもの足跡設置とプロジェクトの総括」
- (2) 高田 和文 (理事)  
「SUACの研究活動15年の成果」
- (3) 谷川 憲司 (デザイン学科)  
「五感で音楽を感じて楽しむアート・ツール・環境の開発」
- (4) 横田 秀樹 (国際文化学科)  
「高大接続による高校教育・大学教育・大学入試の研究」
- (5) 林 左和子 (文化政策学科)  
「人口減少時代における地域のあり方を考える」
- (6) 服部 守悦 (デザイン学科)  
「デジタルファブリケーションの活用によるデザイン  
研究・開発」
- (7) 船戸 修一 (文化政策学科)  
「浜松市の中山間地域における空き家の文化資源的価値  
についての研究：浜松市天竜区を事例として」



## 編集後記

本学研究史『静岡文化芸術大学の研究活動15年の成果』の編集で、過去の研究、セミナー、イベント等の資料整理を担当しました。2000年開学のさほど長いとはいえぬ本学の歴史ですが、特別研究だけで500を超えるプロジェクトが蓄積され、データ整理は大変な作業となりました。このとき強く意識したのが、研究活動等大学で取り組む事業のアーカイブ整備の意義です。欧米諸国に比べ日本は政府や企業、大学などの記録保存、整理、公開の体制が不十分といわれますが、大学の記録も組織的、戦略的にアーカイブ化を進めなければ日々の多忙の中で数年前のことも忘れてしまう可能性があるでしょう。文書資料は勿論、写真・音声・映像など様々な形でのアーカイブ整備は、大学の社会的責任を担保する上で極めて重要であり、“レガシー”創造のベースとなるものです。この『文化と芸術』も号を重ねる中でその一端を担っていると考えています。(St.)

Art & Culture

文化・芸術

文化・芸術研究センター  
ニュースレター

Vol.27

March 2018

発行人：峯郁郎 編集人：富田晋司  
発行：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター  
(事務局 静岡文化芸術大学 地域連携室)

